教育雑誌の分析（その１）

――特集テーマの分類と考察――

岡　本　奎　六

１．教育雑誌９誌の特集テーマの分類と考察

本研究では、先ず(表１)に示す教育雑誌９誌の特集テーマの分類を行なった。特集テーマから、各誌の特徴を知るためである。

これら９誌は、いずれも市販の月刊誌で、「初等教育資料」は毎号２テーマずつ、他誌は１テーマずつ、特集テーマを掲げている。

分析された雑誌は、各誌とも過去３ケ年間前後に発行された最近号で、それぞれ30～40点の範囲にまたがる。毎年12点の雑誌が多いが、中には別に臨時増刊号を発行するものもあれば、「７・８月合併号」のように、２ケ月分をまとめてしまう雑誌もある。

表１には、教育雑誌名、発行所名、分析された特集テーマ数、その特集テーマを掲げた雑誌の発行期間が示してある。この表によると、教育調査研究所発行の「教育展望」誌については、本研究で分類した特集テーマ数は、32点である。これら32点の発行期間は、昭和60/1から昭和63/3の39カ月である。しかしこの間に、１・２月号と７・８月号はいずれの年も合併号になり、７・８月号、１・２月号でそれぞれ一テーマしか掲げていない。それゆえ39カ月の間に、32テーマの特集がなされているのである。

本稿のこの章で、先ず教育雑誌の特集テーマを分類し、その頻度を算出したのは、教育雑誌の特集テーマの中で、「教育評価」はどの程度の重みを持っているか。また教育評価の中で、「学力評価」を中心としたテーマは、どのくらいの重みを持っているか。そういう点も、抑えたかったからである。

なお、つぎの教育雑誌各誌の分類枠組は、あえて共通の枠組を用いなかった。その理由は、各誌の扱う特集テーマの領域・分野にかなり喰い違いがあり、

各誌の特色を浮き掘りにするには、ある程度異なる分類枠組を用いた方が、有効のように思えたからである。以下のところで、各雑誌別に特集テーマの分類を示すことにしよう。

（表１）教育雑誌九誌の名称と特集テーマ数

雑　誌　名	発　行　所	特集テーマ数	発 行 期 間
1.教育展望	教育調査研究所	3 2	60/1～63/3
2.初等教育資料	東洋館出版	6 7	60/4～63/1
3.中等教育資料	大日本図書	3 5	60/4～63/2
4.総合教育技術	小学館	3 5	60/5～63/3
5.授業研究	明治図書	3 5	60/5～63/3
6.学習指導研究	教育開発研究所	3 5	60/5～63/3
7.指導と評価	図書文化社	3 9	60/1～63/3
8.児童心理	金子書房	3 3	61/1～63/3
9.教育心理	日本文化科学社	2 9	61/1～63/3

（注）発行期間は、この研究に用いた雑誌の発行期間である。発行期間欄の、たとえば「60/1～63/3」は昭和60年1月から昭和63年3月までの号である。

(1)「教育展望」の特集テーマ（32点）の分類

1）学校論（テーマ数10点）

① 再生への構図 (60/4)　② 自己教育力の育成 (60/7.8)
③ 明日への教育 (61/1.2)　④ 個性重視の教育 (61/3)
⑤ 転機に立つ学校 (61/6)　⑥ 教育工学への招待 (61/10)
⑦ 人間教育への潮流 (61/12)　⑧ 人間関係の省察 (62/5)
⑨ 学校経営の課題 (62/9)　⑩ 子どもが生きる学校(63/3)

2）授業論（テーマ数10点）

① 授業成立の要件 (60/5)　② 基礎・基本の省察 (60/9)
③ 自己教育力育成の方途(60/11)　④ 個を生かす授業 (61/4)
⑤ 自己教育力考 (61/7.8)　⑥ 自己教育力育成の方略(61/11)
⑦ やる気の考察 (62/3)　⑧ 生活科の検討 (62/6)
⑨ 続・生活科の検討 (62/10)　⑩ 個性教育の探究 (62/11)

3）教育評価論（テーマ数7点）

① 自己評価の考察 (60/3)　② 関心・態度の評価 (60/6)

③ 基礎・基本の評価	(60/10)	④ 個を育てる評価	(61/5)
⑤ 形成的評価	(61/9)	⑥ 評価観の吟味	(62/4)
⑦ 個を生かす評価	(62/7.8)		
4) 教育改革論・教区課程論（テーマ数5点）			
① 私の教育改革論	(60/1.2)	② 教育改革に望む	(60/12)
③ 教育改革への提言	(62/1.2)	④ 臨教審答申を読む	(62/12)
⑤ 転換期の教育	(62/3)		

(1) 「教育展望」の32の特集テーマは、表に見られるように、「学校論、授業論、教育評価論、教育改革論（教育課程論）」という枠組を用いて分類した。このうち、学校論、授業論、教育評価論という枠組は、すでに同誌の特集号名の初めに付加してある、同誌編集者の分類枠組でもある。これに教育改革論（教育課程論）を加えた分類枠組を構成した。

この表にみられるように、1）学校論は2）授業論と並んで最も特集テーマ数が多く、10点となっている。前者は、かなり抽象的なレベルでの学校教育の目標、学校の在り方・運営などを扱っているのに対し、後者の授業論の方は、より具体的に現実に行われる授業、学習指導に直結した具体的目標、指導法、授業技術等を扱っている。

3）の教育評価論の特集テーマは、学習指導と表裏一体の関係にある教育評価の課題のうち、今日とくに問題とされている課題を取り扱っている。表に示されている、自己評価、関心・態度の評価、基礎・基本の評価、個を育てる評価、形成的評価は、いずれも教育評価の中の、重要な今日的課題である、といえよう。4）の教育改革論は、中教審、臨教審等の審議を経て、ようやく現実化されつつある新教育課程成立に至る過程での問題を、主として扱っている。

本誌は、誌名が示すように、広い視展から学校教育を展望していることが、これらの特集テーマによく現れている。

第2に、教育評価論を学習指導論ないし授業論に近い線まで重視している点も、後に述べる多くの他誌と比較した時の特色といってよかろう。

(2) 「初等教育資料」の特集テーマの分類（テーマ数は全部で 67）

1) 「教科研究の動向 —— ○○」として、○○につぎの教科名を入れたもの（テーマ数は 6）

① 国語 (60/4) ② 社会 (60/5) ③ 算数 (60/7)
④ 道徳 (62/4) ⑤ 特別活動 (62/3) ⑥ 教育課程一般 (62/4)

2) 「○○における学習指導の工夫」として、○○につぎの教科名を入れたもの（テーマ数は 6）

① 理科 (60/9) ② 図画・工作 (60/11) ③ 家庭 (60/12)
④ 体育 (61/2) ⑤ 音楽鑑賞 (61/3) ⑥ 作文 (61/4)

3) 「一人一人を生かす○○の学習指導」として、○○につぎの教科名を入れたもの（テーマ数は 7）

① 社会 (61/5) ② 算数 (61/7) ③ 体育 (61/8)
④ 理科 (61/9) ⑤ 音楽 (61/10) ⑥ 工作 (61/11)
⑦ 家庭 (62/1)

4) 「学習指導法を見直す —— ○○」として○○につぎの学習活動を入れたもの（テーマ数 3）

① 表現活動 (62/1) ② 集団活動 (62/2) ③ 操作活動 (62/3)

5) その他の学習指導に関する特集テーマ（テーマ数 8）

① 学力の実態把握・活用 (60/6) ② 教材の開発整備 (60/2)
③ 教師のティーム指導 (60/9) ④ 理科学習指導の多忙化 (60/9)
⑤ 個人差を生かす音楽指導 (61/11)
⑥ 実践的態度を育てる家庭科指導 (60/12)
⑦ 創作性を育む (62/10) ⑧ 子どもの直観 (61/10)

6) 「体験を生かす○○力を育てる」として、○○につぎの能力を入れたもの（テーマ数 3）

① 思考 (61/1) ② 表現力 (61/2) ③ 実践力 (61/3)

7) 「○○を育てる」として、○○に主として情意能力を入れたもの（テーマ数 6）

① ふるさと意識 (60/7) ② 基本的生活習慣 (60/8)
③ 健康でたくましい子 (60/11) ④ 思いやり (61/7)
⑤ 豊かな心 62/8) ⑥ 自ら学ぶ意欲 (62/5)

8) その他の特別活動の特集（テーマ数 7）

① 集団宿泊指導 (60/8) ② 特活の実施状況と活用 (60/10)
③ 個性をはぐくむ学級作り (61/7) ④ 体育行事 (61/9)
⑤ 学校と家庭・地域の連携 (62/9) ⑥ 個を生かす (62/6)

⑦　たくましく生きる　(62/12)
9) 教育改革、教育課程の改善に関する特集（テーマ数は8） ①　「教育課程の改善 ― ○○」として、○○につぎの教科名を入れたもの ①　国語　(62/5)　②　社会　(62/7)　③　算数　(62/8) ④　体育　(62/9)　⑤　理科　(62/10)　⑥　音楽　(62/11) ⑦　図工　(62/12)　⑧　家庭　(63/1)
10) その他の特集テーマ（テーマ数13） a)　幼稚園関係　4点　b)　教師の研修　3点 c)　学校経営、国際化に応ずる教育、日本の文化と伝統、体育科の評価基礎・基本の学力、学校が行なう調査それぞれ1点

(2) 初等教育資料の特集テーマは、表に示すように、1）～10）までに分類できる。このうち、1）～5）までは、国語、算数、理科といった教科別の学習指導に関する特集テーマである。1）は教科別の指導研究で6テーマ、2）は教科別の学習指導の工夫で6テーマ、3）は一人一人を生かす教科別の学習指導法で7テーマである。これだけでテーマ数は19である。これに、学習活動の指導に関する4)の3テーマ、学習指導に係わる5）の8テーマを加えると、教科を中心とした学習指導に関する特集テーマ数は、合わせて30となり、調査した特集テーマ67の半数に近い。

以上のように、初等教育資料は、きめの細かい各教科別の学習指導特集に大きな特色がみられる。しかし同時に、6）～8）は、児童会、学級会、学校行事、クラブ活動等の特別活動に密接に係わる特集である。6）の「体験を生かす○○力を育てる」の、○○である「ふる里意識、豊かな心、思いやり」などは、認知的能力というよりも情意的能力であり、特別活動と密接な関係のあることはいうまでもない。8）の集団宿泊指導、体育行事は、特別活動の中の文字通り「学校行事」であり、学級作りは、特別活動の中の「学級会活動」の仕事である。こうみてくると、表の6）～8）までの特集テーマ合わせて24は、特別活動の各領域ごとの指導を中心テーマとし、学習指導同様、きめ細かい特集をしている。

第3に、表の9）は、教育改革、ないし教育家庭の改善を扱ったもので、

中教審、臨教審等の一連の審議の上に成案を見つつある新しい教育課程を問題にしている。

最後に表の 10) であるが、これはその他のテーマということで、雑多なものが含まれている。幼稚園教育や幼・小の関連、教師の研修、学校経営やこれからの国際化社会に応する教育論など、さまざまなものがある。

この中に、教育評価関係のものとしてはただ一つ、「体育科の教育評価の工夫」(61/2)が含まれている。もっとも、表だって教育評価ということばを用いてはいないが、内容的に教育評価を含んだ特集テーマは他にもある。「学力の実態把握とその活用を工夫する」(60/6)、「学校が行う調査を見直す」(61/6)がこれである。

(3) 「中等教育資料」の特集テーマの分類（テーマ総数は 35）

1) 「一人一人を伸ばす学習指導 —— ○○」として、○○に次の三教科名を入れたもの（テーマ数は 3） ① 国、社、数（60/8）　② 理、音、美（60/9） ③ 保・体、技・家、外国語（60/11）
2) 「各教科における指導の重点 —— ○○」として、○○につぎの三教科名を入れたもの（テーマ数は 3） ① 国、社、数（61/5）　② 理、音、美（61/6） ③ 保・体、技・家、外国語（61/7）
3) 「自ら学ぶ意欲を育てる教科の指導 —— ○○」として、○○につぎの三教科名を入れたもの（テーマ数 3） ① 社、理、保・体（62/8）　② 音、美、技・家（62/9） ③ 国、数、外国語（62/10）
4) 上記以外の学習指導に関する特集（テーマ数は 5） ① 学ぶ力を育てる（60/4） ② 個人差に応ずる学習指導（61/9） ③ コンピューター利用の学習指導（62/6） ④ 基礎・基本を考える（63/1） ⑤ 個に応じた一斉指導（63/2）
5) 生徒指導、特別活動関係の特集（テーマ数は合わせて 12） ① 若者文化と生徒指導（60/6）

② 健康・体力の向上と学校経営（60/7）
③ いじめへの対応（60/10）
④ 中、高校に於る生き方指導（61/4）
⑤ 道徳・特活指導の重点（61/8）
⑥ 中・高校生と性の指導（61/9）
⑦ 地域の教育力を生かす（61/11）
⑧ 校風を考える（62/1）
⑨ 特色ある学校作りをめざす学校経営（62/5）
⑩ 生徒指導に求められるもの（62/7）
⑪ これからの進路指導（62/11）
⑫ 高校教育と地域社会（61/2）

6）教育課程に関する特集（テーマ数は3）
① 教育課程実施に関する総合調査（60/12）
② 教育課程編成の工夫（61/3）
③ 教育課程評価の工夫（62/3）

7）上記以外のその他の特集（テーマ数は6）
① 言語環境を整える（60/5） ② 21世紀に向けた中等教育（61/1）
③ 国際化に応ずる教育（61/12）④ 社化の変化と教師の研修（62/2）
⑤ 知・徳・体の調和的な発達をめざす（62/4）
⑥ 生涯学習社会と学校教育（62/12）

(3) 「中等教育資料」の特集テーマで最も多いのは、初等教育資料同様に、学習指導に関するもので、調査した35テーマ中の14テーマと、ほゞ半数である。それらは表の1）～4）までに分類されている。この14テーマ中の1）～3）までの9テーマは、教科別の学習指導である。1）は一人一人を伸ばす学習指導、2）は学習指導の重点、3）は教科学習の意欲を育てる指導というように、年度別に統一されている。

4）の学習指導は、通教科的な学習指導であるが、自己教育力、個人差に応ずる学習指導、教育機器利用の学習指導、基礎・基本の学習能力の指導、というように、いずれも学習指導に関する今日的な課題に焦点を当てている。

教科の学習指導についで、本誌で取り上げているのは、5）の生徒指導、特別活動という教科学習以外の活動領域である。テーマ数は12であるから、この領域の指導についても、相当力を入れて編集していることが分かる。中・

高校時代に相応しい若者文化、健康・体力、性の問題、進路の問題、地域社会との係わり、校風・学校作りといったような課題に、巾広く取り組んでいることが分かる。

第三に、教育課程に関する特集は3テーマあり、その実施に関する実態の調査、その編成、およびその評価に関する工夫となっている。

最後にその他としては、学校論中心に、教師の研修、言語環境などの問題をとりあげている。教育評価に関しては、教育課程の評価がただ一つで、学習の評価の特集は一つも行われていない。

本誌は、初等教育資料同様に、教科学習の指導、教科外の活動の指導に、力を入れており、重要な今日的課題中心に、巧みに特集テーマを選択している。ただテーマ数が2倍近い初等教育資料は、きめの細かさは随一であるが、その点では本誌はとくにきめ細かいとはいえない。

(4) 「総合教育技術」の特集テーマで最も多いのは、教育改革・学校論関係の特集で、35テーマ中の13テーマあり、全体の約4割となっている。表にみられるように、臨教審、教科審の答申の解説と共に、教育改革についてのさまざまな提言の特集が行われている。

ついで第二位は、表の2）生徒指導・特別活動関係の特集で、特集テーマ数は10とこれもかなり多い。いじめ、非行児の問題行動の緊急対策と同時に、他方ではしつけ、校則・きまり、性教育など生徒指導にじっくり取り組むべき課題を取り上げている。

第三位の3）学習指導・授業関係の特集テーマも7であるから、少なくはない。自己教育力を育てる、個性重視の教育、個別化をめざす授業、よくわかる授業、学び方を学ぶ等、今日的な学習指導の課題をとりあげている。初等教育資料や中等教育資料が、教科別に詳細に学習指導を取り上げていたのに対し、本誌では通教科的なとりあげ方をしているので、それだけ学習指導は、本誌ではそれほど重要視はしていないといえよう。

広い意味での教師の研修については、表にみられるように3テーマ特集している。教育評価については、関心・態度の評価と子ども自身による自己評

(4) 「総合教育技術」の特集テーマの分類（テーマ総数は 35）

1) 教育改革・学校論関係の特集（テーマ数は 13）
① 私の考える教育課程改革（60/8）
② 臨教審第一次答審（60/9）
③ 教育課程改革と新教育課程（61/1）
④ 人間化をめざす教育計画（61/2）
⑤ 学校が変わる（61/12）
⑥ 現代学校論　（61/5）
⑦ 新教育課程と学校（62/1）
⑧ 新年度教育計画と学校教育（62/2）
⑨ 私の考える学校経営（62/4）
⑩ 補修・塾 — 学校は何をすべきか（62/5）
⑪ 日本の教育をどうする（63/1）
⑫ 教育課程改定のポイント（63/2）
⑬ 教課審答申にみる 11 の課題（63/3）

2) 生徒指導・特別活動関係の特集（テーマ数は 10）
① いじめの深層（60/6）　② 非行ゼロへの挑戦（60/12）
③ 校則・きまりを生かす（61/3）④ いじめの克服　（61/4）
⑤ 学校のしつけ・家庭のしつけ（61/6）
⑥ 問題行動の緊急対策　（61/9）
⑦ 心の教育をどうすすめる（61/11）
⑧ 性教育の課題　（62/3）
⑨ 児童・生徒の活力を育てる　（62/9）
⑩ 学校と家庭の連携　（62/12）

3) 学習指導・授業関係の特集（テーマ数は 7）
① 自己教育力を育てる　（60/5）② 林竹二の授業　（60/10）
③ 個性重視の教育　（60/11）④ わかる授業　（61/10）
⑤ 個別化をめざす授業　（62/6）⑥ 授業研究の新しい試み（62/10）
⑦ 学び方を学ぶ　（62/11）

4) 教育評価の特集（テーマ数は 2）
① 関心・態度の評価　（60/7）　② 新しい自己評価　（61/7）

5) 教師の研修関係の特集（テーマ数は 3）
① 教師に奨めたい本　（61/8　② 教師研修：内容と進め方（62/7）
③ 戦後教育を与えた本 100 冊（62/8）

価の2テーマを特集している。全体的にいえば、本誌は教育改革や教育の新しい動向に対する目配りに注目すべきものを伺うことができる。

(5) 「授業研究」の特集テーマの分類（テーマ数は35）

1) 教室での授業技術・技法に関する特集（テーマ数は20）

① 自ら学ぶ力が育つ	(60/1)	② 授業の演出	(60/2)
③ 子どもへの接し方	(60/3)	④ 教師の指示の仕方	(60/9)
⑤ 子どもへの指示	(60/10)	⑥ 教師の知的生産技術	(61/1)
⑦ 個と集団への配慮の仕方	(61/4)	⑧ 学ぶ意思を育てる	(61/5)
⑨ 授業のくずれ	(61/6)	⑩ 誤答の扱い方	(61/7)
⑪ 指導のことば	(61/8)	⑫ 遅れが出る指導	(61/11)
⑬ 発問の失敗に気づいた時	(61/12)	⑭ 子どもに即した指導	(62/1)
⑮ 授業をだめにする	(62/3)	⑯ 子どもの話し言葉指導	(62/5)
⑰ 導入指導の腕	(62/9)	⑱ 発問作りの腕	(62/10)
⑲ 授業技術	(62/12)	⑳ 自分の授業を変える	(63/1)

2) 授業研究の仕方に関する特集（テーマ数は7）

① 教育改革の動向と授業研究の焦点	(61/2)
② 研究レポートの書き方	(61/10)
③ 授業研究の質の変え方	(62/4)
④ キー発問がつかめる授業研究	(62/6)
⑤ 授業記録の書き方・読み方	(62/8)
⑥ 授業に役立つ教科書研究	(63/2)
⑦ 授業研究としての追試実践	(63/3)

3) 教材・教具作りの技術に関する特集（テーマ数は5）

① 学習手引書の作り方	(60/8)
② ゲーム・クイズ教材の開発	(60/11)
③ 子どもを引きつける教材・教具	(60/12)
④ 練習問題の作り方	(61/9)
⑤ 学習問題の作らせ方	(62/7)

4) 指導案作りの技術に関する特集（テーマ数は2）

① 追試ができる指導案の書き方	(61/3)
② 指導案作りの腕	(62/11)

5) この他に「教師修業 ― 成長を実感できる方法」という特集テーマがある。

(5) 「授業研究」の特集テーマは、表にみられるように、20テーマが1）の教室での授業の技術・技法に関するテーマである。20テーマといえば、実に総テーマ数35の2/3に近い割合である。具体的に特集テーマ例を挙げれば

③「子どもへの接し方 ― すぐれた指導に学ぶ」

④「教師の指示 ― こうすればよくなる」

⑦「個と集団への配慮で授業はこう変る」

⑨「どんな指導が授業のくずれを招くか」

⑪「どんな指導の言葉が子どもに入るか」

といったようなテーマである。このように短文の形で特集テーマは示されているが、表の中では、いずれも文の中の重要語句の部分を抜き出して示してある。

第二位は、2）の授業研究の仕方に関する特集で、テーマ数は7ある。授業研究の対象となる重要な課題、授業研究の為の授業記録の取り方、レポートのまとめ方等がこれである。

第三位は、授業に用いる有効な教材・教具やその作り方である。そして最後が、授業に役立つ指導案の作り方に関する特集である。第三位の教材教具の特集は5テーマ、第四位の指導案の特集は2テーマとなっている。

以上のように、本誌は「授業研究」という誌名が示すように、徹底的に教室現場での授業技術・技法、あるいは授業と密接不可能な教材・教具等を扱うという特色がある。これまでの他誌の分類でいえば、「授業論、学習指導」といった分類領域に焦点付けをしていることが分かる。「誤答の扱い方」のように、評価論に関係あるテーマもあるが、表だって教育評価の特集テーマは取り上げていない。

(6) 「学習指導研究」の特集テーマ35のうち、28テーマは二つの領域に集中している。表に見られるように、その一つは1）の学校論、教育改革論関係の領域で、テーマ数は15である。その二つは2）の学習指導関係の領域で、テーマ数13である。「学習指導研究」という本誌の名前からして，後者の学習指導関係の特集が多いのは当然である。しかし前者の学校論・教育改革関係の特集が多いのはやゝ意外であった。もっとも、この調査の行われた昭和60年

(6) 「学習指導研究」の特集テーマの分類（テーマ数は 35）

1) 学校論・教育改革関係の特集（テーマ数は 15）

① 個性主義への提言 (60/6)
② 創造性の育成と学校教育 (61/6)
③ 現代の精神状況と学校教育 (61/7)
④ 教育課程改革と社会教育 (61/11)
⑤ 教育課程改訂の論点の分析 (61/12)
⑥ 教課審中間まとめの論点 (62/2)
⑦ 教課審中間まとめの論点 (62/3)
⑧ 臨教審と教課審制度の再考 (62/4)
⑨ 生活化構想の検討 (62/7)
⑩ 特別活動改訂の方向 (62/8)
⑪ 臨教審が残したもの (62/9)
⑫ 臨教審が残したもの (62/10)
⑬ 道徳教育の改定 (62/12)
⑭ 教課審答申の分析 (63/3)
⑮ 教育課程の基準改善の視点 (60/10)

2) 学習指導関係の特集（テーマ数は 13）

① 学習の遅れがちな子の指導 (60/7)
② 学習指導の改善と工夫 (60/8)
③ 教師の指導姿勢再考 (60/11)
④ 専門の教師の指導技術 (61/3)
⑤ 生涯学習社会の学習指導 (61/5)
⑥ 思考力の育成と学習指導 (61/8)
⑦ コミュニケーション活性化と学習指導 (61/9)
⑧ 倫理観の滋養と学習指導 (61/10)
⑨ 学習指導の最前線 (62/1)
⑩ 補修の実施と学校信頼回復 (62/5)
⑪ 個別化教育の実践と展望 (62/6)
⑫ 情報社会・国際化社会への対応と学習指導 (62/11)
⑬ 個性を生かす指導の工夫 (63/1)

3) 生徒指導・特別活動関係の特集（テーマ数は 5）

① いじめの把え方と対策 (60/5)
② 教師と子どもの関係 (60/9)
③ 現代社会の中の子ども (61/1)
④ いじめ問題の検討 (61/2)
⑤ 学級作りの基礎・基本 (61/4)

4) 教育評価の特集（テーマ数は 2）

① 個人差に応ずる指導と評価
② 評価技術を考える

からの三年間は、中教審、臨教審、教課審などの答審や中間答申があり、教育雑誌とすれば、その解説は重要な課題であった、といえよう。さらに、これらの答申を受けとめた上での教育論、学校論、新教育課程論は、重要な課題といえよう。したがって、他誌に於てもこの領域はこの期間に比較的多く取り上げられているが、本誌では特に集中的な取り上げ方をしている。

表によると、1）の学校論・教育改革論関係の特集テーマには、たとえばつぎのようなものがある。

⑤　教育課程改定の論点を分析する

⑥　教課審「中間のまとめの論点を分析する」

⑧　臨教審審議と教科書制度再考

⑨　“生活科”構想を検討する

⑬　道徳教育の改定を考える

このように、審議答申全体を分析・解説したものもあれば、生活科や道徳というような特定の学科、活動に限定した解説や論議もみられる。なお、表の中では、重要語句を選んで名詞止めのテーマに変えているが、本誌の特集テーマは上記の例のように短文の形で表現されている。

第二位の2）の学習指導関係の特集テーマ　例は、つぎのとうりである。

①　学習のおくれがちな子どもの指導と評価

⑤　生涯学習社会における学習指導

⑦　コミュニケーションの活性化と学習指導

⑧　倫理観の涵養と学習指導

⑫　情報化・国際化社会への対応と学習指導

これらの特集テーマ例にみられるように、本誌においては、今日的な教育課題を掲げ、その学習指導を中心に扱っている。前出の「授業研究」に較べると、やゝ広い内容領域についての学習指導の問題を扱っており、実践的な授業の技術・技法の細部に渉る「授業研究」誌とは異なる特色がみられる。

第三位の3）の生徒指導・特別活道関係の特集は、表にみられるように5点で、それほど多くはない。他誌のこの領域とくらべて特に異なる特色も見られない。

最後に4）の教育評価関係の特集テーマは3点で、表に示す2点の他に、2）の①の学業の後れた子どもの指導と評価が含まれる。

(7)「指導と評価」の特集テーマ39のうち、第一位は1）指導と評価に関する14テーマである。2)の学習指導は13テーマ、3)の道徳・生活指導は4テーマで、二つの指導を併せると17テーマになる。そして残り8テーマが教育評

(7)「指導と評価」の特集テーマの分類（テーマ総数は39）

1）指導と評価に関する特集（テーマ数は14）

①〜④「個性を生かす指導と評価 ― ○○」として、○○につぎの教科名を入れたもの

国、算・数	(60/1)	技・家、道徳、特活	(60/7)
理、音、図工・美	(61/3)	社、保・体	(61/4)

⑤ 自己学習と自己評価 (60/2)

⑥〜⑨「観点別達成度評価を生かした授業実践 ― ○○」として、○○につぎの教科名を入れたもの

国、保・体	(60/8)	算・数、図工、美	(60/10)
社、体、保・体	(60/1)	社、英、技・家	(61/1)

⑩〜⑮「○○の指導と評価」として、○○につぎの能力を入れたもの

知識・理解	(61/6)	思考・創造性	(61/10)
関心・態度	(62/1)	技能・表現	(62/10)
基本的生活習慣	(61/9)		

2）学習指導に関する特集（テーマ数は13）

①〜② 自己教育力を育てる学校・学級経営 (62/3)

③〜⑦ 「自己教育力と○○」として、○○につぎの活動等を入れたもの

総合活動	(60/3)	図書館利用	(60/12)
学習指導	(61/8)	学習情報メディア	(61/12)
特別活動	(62/6)		

⑧ 学習指導の個別化・多様化 (62/3)

⑨ やる気を育てる (62/7)

⑩ マイコン利用による学習の個別化・多様化 (62/5)

⑪ 学習指導の個性化・多様化 ― 算・数、理 (62/11)

⑫〜⑬「指導案作製における指導目標の焦点化 ○○」としてつぎの教科名を入れたもの

国、社	(62/9)	算・数、理	(63/2)

3) 道徳、生活指導に関する特集（テーマ数は４）	
① 実践力を高める道徳指導 (60/3)	
② いじめの問題を考える (61/7)	
③ 思いやりを育てる道徳指導 (62/12)	
④ 思いやりを育てる学校・学級経営 (63/3)	
4) 教育評価に関する特集（テーマ数は８）	
① 表現・鑑賞の評価 (60/2)	② 通信簿 (60/11)
③ 知能と知能検査 (61/4)	④ 性格と性格検査 (61/11)
⑤ 学習意欲と学習適応性検査 (62/2)	
⑥ 基礎学力と標準力検査 (62/4)	
⑦ 教育評価の個性化・多様化 (62/8)	
⑧ 自己教育力の評価 (63/1)	

価に関する特集である。「指導と評価」という誌名が示すように、本誌の特色は、文字通り指導と評価に徹している。しかも１）の指導と評価に関する特集が第一位であることからもみられるように、本誌では指導と評価は単に併列的なものではなく、両者は密接不可分、表裏一体をなすものという考え方が、明確に現れている。

１）の指導と評価に関する特集テーマをみると、教科群別に個を生かす教育、一人一人を生かす教育における指導と評価を取りあげている。同様に教科群別に、到達度学習、達成度学習における指導と評価を問題としている。また動機・理解、思考、技能・表現、関心・態度という学力の四大要素別に、あるいは認知（知識・理解、思考）、技能（技能・表現）、情意（関心・態度）という三大能力別に、その指導と評価を扱っている。こういう組織的で偏りのない特集テーマの選び方は、以下のところにもみられる本誌の特色といえる。

２）の学習指導に関する特集テーマについては、自己教育力の指導育成を、教科学習、教科外の様々な特別活動について、組織的に扱っている。それと、教科群別に、指導目標の焦点化を取り上げ始めたことが注目される。本誌においては、指導目標の焦点化に限らず、既に１）で述べた個を生かす教育、到達度学習、２）でのべた自己教育力と ― これらはいずれもそうであるが

一、重要な今日的な教育課題を取りあげるという編集意図も本誌の特色といえよう。その点は、3）の道徳・生活指導における実践力、いじめ、思いやりの心についての特集についてもいえる。

4）の教育評価に関する特集テーマは8テーマで、他誌にくらべ重要視していることがわかる。これに指導と評価にまたがる特集14テーマを加えるなら22テーマとなり、教育評価関係は、本誌の著しい特色といってよかろう。しかも扱っている評価領域にもかなり大きな拡がりがみられる。たとえば、教科の学力要素からする表現・鑑賞の評価、評価の機能からする通信簿（総括的評価の一種と考えられる）、性格検査、知能検査のような標準化検査といった具合にである。さらに自己教育力の評価、教育評価の個性化・多様化などは、前にも述べた重要な今日的教育課題の立場からの、教育評価への切り込みということができよう。

(8) 「児童心理」の特集テーマの分類（テーマ数は33）

1）生活指導：特別活動関係の特集（テーマ数は14）	
① 魅力ある学級づくり (61/5)	② たくましい子に育てる (61/6)
③ 生活習慣のしつけ (61/8)	④ 正しい自己主張を育てる (61/9)
⑤ 負けない子：競争の心理と教育 (61/10)	
⑥ 好かれる子・嫌われる子 (61/12)	
⑦ 小学生の性教育 (62/2)	
⑧ ふれあいのある学級づくり (62/4)	
⑨ 努力のできる子 (62/5)	
⑩ よい友だちづくり (62/8)	
⑪ 子どもの本：心の成長と読書 (62/10)	
⑫ カウンセリングマインド (62/6)	
⑬ 子どもにとっての先生 (61/10)	
⑭ 幼児の教育・保育 (62/12)	
2）生活指導：家庭教育関係の特集（テーマ数は7）	
① よい家庭の条件 (61/4)	② 親と教師のほめ方・叱り方 (61/6)
③ 家族のつながり (62/1)	④ 甘えとわがまま (62/6)
⑤ 親のきびしさ・教師のきびしさ (62/10)	
⑥ 母と子のつながり (62/6)	⑦ 父親の役割 (63/1)

3) 子どもの心理・生活関係の特集（テーマ数は7）			
①	子どもたちはいま (61/1)	②	現代っ子の遊び (61/7)
③	子どもの体総点検 (61/11)	④	受難の子どもたち (61/10)
⑤	女の子・男の子 (61/12)	⑥	追いたてられた子ども (62/3)
⑦	子どものストレス (62/9)		
4) 学習指導関係の特集（テーマ数は5）			
①	話せる子・聞ける子 (61/2)	②	身につく学び方 (61/3)
③	子どもの自己教育力 (62/7)	④	子どもを伸ばす評価 (63/2)
⑤	やる気を育てる (63/3)		

（註）特集テーマの後の（62/6）は昭和62年6月特集号という符合である。

(8) 「児童心理」の特集テーマ33についていえば、生活指導の領域が著しく多い。1）の生活指導・特別活動の14テーマは、学校における特別活動を中心としたテーマである。しかしこれらは、同時に家庭教育における生活指導にも、密接に係わるものが少なくない。

これに対して、2）の生活指導・家庭教育の7テーマは、相対的な意味で、家庭教育における生活指導に密接に係わるテーマである。

3）の子どもの心理・生活の7テーマは、子どもの心理や生活、子どもと今日の社会状況との絡み合いに関するテーマで、「児童心理」という誌名に相応しい、本誌の一つの特色を示す領域である。もちろん、これらの特集も、直接間接指導の問題を扱っている。

最後に、4）の学習指導の5テーマは、他誌にくらべ、著しく少ない。

以上のように本誌の特色は、1)、2)の子どもの生活指導に重点があるように思われる。調和的な子どもや、豊かな子どもの生活をめざす編集意図が伺われる。

家庭教育に関するテーマが、他誌にくらべて多いだけでなく、学校教育と家庭教育に共通するようなテーマの多いことも、本誌の特色といえるであろう。本誌の読者対象は、教師その他の学校教育関係者や児童教育の研究者だけではなく、子どもの父母などの家庭教育にたずさわるものも、広く対象としているのかもしれない。

教育評価については、「子どもを伸ばす教育評価」が唯一の特集テーマである。

(9) 「教育心理」の特集テーマの分類（テーマ数は 30）

1) 生活指導・特別活動関係の特集（テーマ数は 13）	
① 子どもが育つ学級	(61/5)
② 性の心理と指導	(61/8)
③ いじめのない学校	(61/9)
④ 教師の知らない子どもの心理	(61/12)
⑤ 無気力からやる気	(61/6)
⑥ 子どもの自立心	(62/1)
⑦ がまん強さを育てる	(62/2)
⑧ 子どもの適性と進路	(62/3)
⑨ 魅力ある学校	(62/5)
⑩ 基本的生活習慣を見直す	(62/8)
⑪ 思いやりのある子ども	(62/11)
⑫ 子ども理解のポイント	(63/2)
⑬ 「よい子」を見直す	(63/3)
2) 問題行動・カウンセリングの特集（テーマ数は 10）	
① 教師の悩みに答える	(61/2)
② 登校拒否児の指導	(61/7)
③ 学校カウンセリングの実態	(61/11)
④ 担任による教育相談手引	(61/⑩)
⑤ 無気力からやる気	(61/6)
⑥ カウンセリング・マインド	(62/7)
⑦ 孤立した子の指導	(62/6)
⑧ 登校を拒否する子ども	(62/9)
⑨ いじめの再考	(62/10)
⑩ 問題行動ハンドブック	(62/⑫)
3) 学習指導の特集（テーマ数は 6）	
① 自己教育力を育てる	(61/1)
② 子どもの知的好奇心	(61/3)
③ わかる授業の工夫	(61/10)
④ 勉強好きな子・嫌いな子	(62/4)
⑤ 個性を育てる	(62/12)
⑥ やる気を育てる	(63/1)
4) その他として「教師への期待」	(61/4)

（註）表のテーマ後の(61/⑩は昭和 62 年 10 月特集号という意味)

(9) 「教育心理」の特集テーマ30のうち、第一位と第二位は生活指導に関するもので、前者は12、後者は10テーマと極めてテーマ数は多い。生活指導関係のテーマが多いということは、「児童心理」同様に、本誌の一つの特色である。生活指導関係の中でも、2）の問題行動・カウンセリングは、本誌の著しい特色で、他誌ではこの下位領域はそれほど力を入れて扱っていない。読者対象として、学校カウンセラーや教育相談関係者もかなり意識した編集方針のように見受けられる。

本誌の特集テーマ分類に当たっては、「子どもの心理・生活」という領域は設けなかった。したがって子どもの心理を扱った特集テーマは生活指導や学習指導の領域に振り分けてある。あえて、この領域を立てるなら、そのテーマ数は少なくとも三つはある。「子どもの知的好奇心（61/3）」、「教師の知らない子どもの心理（61/12）」、「子どもの自立心（62/1）」がこれである。

第三位の3）学習指導に関する特集は、テーマ数6で、「児童心理」と同様に、その他の教育誌に比べ、少ない方である。

本誌の特集テーマには、表だって教育評価に関する特集テーマは見当たらない。この点は「教育心理」という誌名から考えると意外であった。学習指導と教育評価は、少なくとも教育心理学特有のかなり重要な領域と考えられるからである。もっとも、本稿で扱った本誌の特集号は、30点で、昭和61年1月号から昭和63年3月号までという限られた期間のものであるから、多少見本の偏りがあるかもしれない。

以上の分析を通じて、教育雑誌9誌は、特集テーマの内容領域の中心にかなり相互のづれがある。さらに、とり上げる内容領域の大小にも、かなり大きな差のあることがわかった。

2．「指導と評価」創刊号からの特集テーマの分類と考察

本稿の第1章では、月刊の教育雑誌9誌の最近3年間前後の特集テーマを、雑誌別に分類し、これを資料として各誌の特徴を概観した。それによると、「指導と評価」は、指導と評価の密接不可分な関係を踏まえて、特集を行っている。そして教育評価については、他誌より群を抜いて大きく取り上げて

いることが明らかとなった。

そこで本章においては、同誌の昭和30年4月創刊号から昭和59年12月号までの特集テーマすべてを分類し、同誌の特徴を一層明確にする。特集テーマの分類に当っては、5ケ年単位にまとめて表を作製した。

なお同誌は、昭和30年の創刊号から昭和34年の3月号までは、「教育評価」

（表2）「指導と評価」特集テーマの発行年代別の分類

発行年代	昭和30年代		昭和40年代		昭和50年代		全期間
特集号の分類	前半	後半	前半	後半	前半	後半	
1.教科学習の評価	8	12	9	15	26	37	107
	(12)	(21)	(16)	(25)	(43)	(64)	(31)
2.教科外活動の評価	4	5	3	1	6	2	21
	(8)	(9)	(5)	(2)	(10)	(3)	(6)
3.学校経営等の評価	3	1	2	0	4	3	13
	(6)	(2)	(4)	(0)	(7)	(5)	(4)
4.標準化検査	6	8	9	10	5	3	41
	(12)	(14)	(16)	(17)	(8)	(5)	(12)
5.評価技術等	6	7	9	4	4	4	34
	(12)	(12)	(16)	(7)	(7)	(7)	(10)
6.評価の記録簿	9	4	6	11	4	3	37
	(17)	(7)	(11)	(18)	(7)	(5)	(11)
7.評価の課題等	2	1	5	3	2	2	15
	(4)	(2)	(9)	(5)	(3)	(3)	(4)
8.学習・生活指導等	10	16	14	11	7	4	65
	(19)	(28)	(25)	(18)	(12)	(7)	(19)
9.その他	4	3	0	2	2	0	11
	(8)	(5)	(0)	(3)	(3)	(0)	(3)
総　　計	52	57	57	60	60	58	344

（注1）　表の中の数字は、特集テーマ数を、括弧内の数字はその％を示す。

（注2）　発行年代は、昭和30年代の前半、後半というように5年単位にまとめてある。

という誌名であった。昭和34年4月号から「指導と評価」に改め、今日に至っている。

先ず、(表2)をざっと眺めてみよう。この表は、昭和30年から59年までの30年間を、5年単位に6期に分ける。そして各期について、特集テーマを9分類し、テーマ数とその%を算出・表示したものである。この表から、つぎのことがいえる。

1) 全期間の特集テーマ（総計 344）についていえば、最もテーマ数が多いのは、最上列に示す1)教科の学習評価に関するテーマである。107テーマで、これは全体の37%を占める。

5年単位に6期にわけた資料によれば、それは昭和30年代前半が最も少なく、8テーマ15%である。このテーマは期を追うにつれ増大し、昭和50年代後半には、37テーマ64%と、6割以上が教科学習の評価に関する特集テーマとなっている。本誌が、教科の学習指導を含めての学習評価に、いかに力をいれているか、そしてその傾向はいかに年代と共に強められつつあるか、これで明らかである。

2) 全期間を通じて第二位は、8) 学習指導、生活指導である。テーマ数は65で、テーマ総数の19%に当る。第一位の1)教科の学習評価の31%に比べれば1割強少ない。年代的にみると、昭和50年代の前半ごろから%が減少し、50年代後半には10%を割っている。評価と結び付かない指導だけの特集テーマは、本誌では歓迎されない傾向を示す。

3) 全期間を通じての分類で、第3位から第5位までは、4) 標準検査、6) 教育評価の記録簿、それに5)評価の技術・方法である。それらは、41テーマ12%、37テーマ11%、34テーマ10%と、テーマ総数の1割というところである。

また、5年単位に6期に分けると、昭和50年代にはやゝテーマ数が減少する傾向を示すが、それほど明確な減少とはいえないであろう。これらの3領域も、本誌にとっては重要な特集テーマ領域ということができよう。

4) 全期間の集計で第6位から第9位までのテーマ群は、2) 教科外活動、

生活指導、7）評価の記録簿、3）学校経営、教育課程等の評価、それに9）その他の教育問題である。これらはいずれも10%を割っており、テーマ数としては少ない。しかし9）のその他の教育問題を除く3つのテーマ分類は、いずれも教育評価に関するテーマとしては重要なテーマである。その為か、これら3つのテーマ群は、6期を通じて、ほとんど毎期特集テーマとしてとりあげられている。

以上のように、「指導と評価」の特集テーマを9分類すると、第1位は「教科学習の評価」で総テーマ数の約3割、第2位は「学習指導、生活指導」で約2割となる。第3位から第5位は、「標準化検査」、「教育評価の課題・歴史」、「評価の技術・方法」の3グループで、それぞれ約1割である。残りの4グループは、「教科外活動、生活指導の評価」、「学校経営・教育課程等の評価」、「教育評価の課題・歴史」、それに「その他の教育問題」で、これらはいずれも1割を割っており、5%前後である。「学習指導、生活指導」と「その他の教育問題を除く7テーマ群は、いずれも教育評価に関するものである。それら7テーマ群のテーマ数は、あわせて286テーマであり、これは総テーマ数の78%である。いいかえれば、本誌は創刊号以来の30年間の特集テーマの約8割は、教育評価に関するテーマを掲げている、ということで、この傾向は、昭和50年代までは年代が進むにつれ、強まる傾向がある。本誌の最大の特色といえば、わが国唯一の「教育評価」の専門誌である。しかもその中では、「教科学習の指導と密接に結び付いた学習評価」を中心としている。このことは、（表2）の資料からも証明された。

つぎに5年単位に6期に分け、さらに詳細に、本誌の特集テーマを分析しよう。

(1) 教育雑誌「指導と評価」第1期（昭和30年～34年）の特集テーマ52を、9分類したのが、次の表である。この表から、つぎのことがいえる。

1) 第1期にはまだ、総テーマ数の20%を超えるような、めだってテーマ数の多い分類は見当たらない。「教科学習の評価」、「標準化検査」、「教育評価の記録簿」、「教育評価の技術・方法」、それに「学習指導、生活指導」の5

(1) 第1期（昭和30年〜34年）の特集テーマの分類（総テーマ数は52）

1）教科学習の評価（テーマ数8）

a） 教科別、観点別の学習評価

①社会科の評価（33/6）　②道徳の評価（34/2）
③算数の指導目標と評価（34/4）④鑑賞と評価（34/5）
⑤読みの評価（34/6）　⑥作文の指導と評価（34/7）

b） 目的・機能別の学習評価

①診断と評価（31/9）　②学年末の評価（33/3）

2）教科外活動の評価（テーマ数4）

① 教科外活動と評価（31/9）　② 学校行事の評価（31/10）
③ 運動会の評価（32/9）　④ 学芸会の計画と評価（34/1）

3）学校経営、教育課程等の評価（テーマ数3）

① 学校評価（33/5）　② 学力調査とカリキュラム(33/10)
③ 教師評価の問題（32/12）

4）標準化検査（テーマ数6）

① 知能検査（30/5）② ビネー特集（31/1）
③ 学年始めのテスト計画（33/4）④ 新学期のテスト計画（31/4）
⑤ 就学児のテスト（34/12)⑥ 二学期のテスト計画（30/9）

5）評価の方法・技術一般（テーマ数6）

① 観察とテスト（30/5）　② ケース・スタディ（31/11）
③ 環境調査（32/5）　④ 基礎学力の調査（32/6）
⑤ 評価の観点（31/12）　⑥ 心理学に於る誤りの問題(31/8)

6）教育評価の記録簿（テーマ数9）

① 指導要録改定の動き（30/7）② 指導要録改定の考え方（30/8）
③ 改定指導要録（30/11）④ 指導要録の行動の記録（31/1）
⑤ 指導要録の補助簿（32/2）⑥ 指導要録の活用（31/2）
⑦ 学習・行動の記録（32/8）⑧ 標準テストと指導要録（33/2）
⑨ 指導要録改定の方向（33/11）

7）評価の基本課題、問題史（テーマ数2）

① 教育評価の基本問題（30/10）② 教育評価の課題（33/1）

8）学習指導・生活指導（テーマ数10）

① 能力に応じた指導（32/4）　② 道徳教育（32/10）
③ 言語学習の心理と教育（33/7）④ 科学技術教育（33/12）
⑤ 精神薄弱児の教育（34/3）　⑥ 保健・体育（33/9）
⑦ 特殊教育（33/12）　⑧ 漢字指導の問題点（34/10）

⑨ 夏休みをどうするか(31/7)		⑩ 夏休みを迎えて	(34/8)
9) その他の教育問題（テーマ数４）			
① 新入学児と学級編成	(31/3)	② 教師の精神衛生	(34/11)
② 創刊に当たりて		④ 教育実験の進め方	(31/3)

つは、いずれもテーマ数６～10の範囲で、これは総テーマ数の10%～20%の範囲である。残りの４分類は、いずれもテーマ数３ないし４で、これは総テーマ数の６%、８%に当る。

2) 「教科学習の評価」は、表に見られるように、さらにａ)、ｂ）２つに分かれる。ａ)には、社会科の評価、算数の評価のように、教科別の評価と、読みの評価、作文の評価のように、教科の中の内容領域観点別の評価を特集したものである。これに対してｂ）は、診断目的のための評価とか、学年末の総括機能を受け持つ評価である。このａ)、ｂ)という下位の分類は、第２期以降の各期にも通用している。

3) 「標準化検査」は、知能検査、就学児用の（知能）テストの他に、年度始めや学期始めの標準テストを中心としたテスト実施計画の問題が、この期にはとり上げられている。

「教育評価の技術・方法」については、観察法、テスト法、ケース・スタディー、環境調査、基礎学力調査など、評価の技法、技術が主にとりあげられている。

4) 「教育評価の記録簿」に関しては、指導要録中心であり、公簿としての指導要録の改訂に伴い、さまざまな角度からこれを大きくとりあげたことが分かる。

「学習指導、生活指導」は、特殊教育や言語学習、夏休みの生活指導等多方面に渡っている。注目すべき特集テーマとしては、「能力に応じた指導」が、早くもとり上げられていることである。これは、中教審答申にとり上げられ、こんにち問題にされている「指導の個性化・多様化、一人一人を生かす指導」と同一線上にある考え方である。

5) テーマ数は比較的少なかった分類中の、「教科外活動・生活指導の評価」

では、運動会、学芸会等特別活動の中の学校行事が中心である。

「学校経営、教育課程等の評価」では、学校評価、教育課程改善の為の学力調査等がとりあげられている。

「教育評価の課題・歴史」では、前者の教育評価の基本課題の考察がとりあげられている。

以上のように、第一期の特集テーマは、各分類領域から、比較的均等に、巾広くとりあげられていることが目につく。

(2) 第2期（昭和35年～39年）の特集テーマの分類（テーマ数は57）

1) 教科学習の評価（テーマ数は12）

a) 教科別、観点別の学習評価

① 社会科の観点別評価（36/11） ② 算数科の観点別評価（37/2）
③ 理科の観点別評価 (37/4) ④ 国語科の観点別評価（30/6）
⑤ 技能の評価 (37/9) ⑥ 道徳教育の評価 (38/3)
⑦ 音楽の評価 (39/3) ⑧ 読書指導と評価 (39/10)
⑨ 社会科の評価 (39/10)

b) 評価目的・機能別の学習評価

① 学業不振児の診断・治療（35/11） ② 年度末の評価 (36/3)
③ 学習指導の平常の評価 (38/11)

2) 教科外活動・生徒指導の評価（テーマ数5）

① 入学試験 (36/12) ② 問題児の診断と指導（37/5）
③ カウンセリングとテスト(37/11) ④ 進路指導と入試問題（37/12）
⑤ 運動会の企画と評価 (68/8)

3) 学校経営、教育課程等の評価（テーマ数1）

① 新しい学校評価 (39/12)

4) 標準化検査（テーマ数8）

① 標準学力検査の傾向（35/1） ② 性格検査の傾向と問題点(35/2)
③ 進学・就職におけるテスト(36/10) ④ 性格・行動の診断 (39/2)
⑤ 学力調査と標準学力検査(38/3) ⑥ 知能診断 (38/10)
⑦ わが校のテスト計画（35/9） ⑧ 年度始めのテスト計画 (39/4)

5) 評価の技術・方法（テーマ数7）

① 試験問題の作製原理（35/5） ② 試験結果の処理と反省（35/6）
③ 学力調査の在り方 (36/1) ④ テストの実践的活用 (36/8)

⑤ 教師作製テスト (37/1) ⑥ 学力調査結果の利用 (39/6)
⑦ 効果的な試験のやり方 (39/11)

6) 教育評価の記録簿（テーマ数４）
① 指導要録改訂 (36/2) ② 通信簿・補助簿 (36/5)
③ 新指導要録 (36/7) ④ 成績のつけ方・知らせ方 (38/2)

7) 教育評価の課題・歴史（テーマ数１）
① テストの歴史と招来 (36/6)

8) 学習指導、生活指導（テーマ数 16）
a) 生活指導
① 教育相談 (35/10) ② 非行と教育相談 (38/7)
③ 学校カウンセラー (39/1) ④ 非行と課程環境 (39/8)
⑤ 学校行事 (37/3) ⑥ 休暇中の安全指導 (37/7)
⑦ 非行少年 (37/8) ⑧ 学校担任の仕事 (38/4)
b) 学習指導
① 科学技術教育 (35/4) ② 宿題 (35/7)
③ 学力の問題 (35/12) ④ プログラム学習の検討 (38/1)
⑤ 統計教育 (38/6) ⑥ テレビ教育の検討 (38/12)
⑦ 学習週間の形成 (39/5) ⑧ 道徳の資料 (39/7)

9) その他の教育問題（テーマ数３）
① 新教育課程への移行措置 (35/3) ② 学校ＰＴＡの持ち方 (36/6)
③ 現場の教育研究法 (37/10)

第２期（昭和 35 年～39 年）の特集テーマの分類では、「教科学習の評価」と「学習指導、生活指導」の２群が、総テーマ数の 20％代に上昇し、第１グループを形成している。ついで第２グループは、「標準化検査」、「教育評価の技術・方法」が、第１期同様 10％代の値を占めている。残りの「教科外活動・生活指導の評価」、「学校経営・教育課程の評価」、「教育評価の記録簿」、「教育評価の歴史・課題」は、10％を割り、第３グループとなっている。この中の「教育評価の記録簿」は、第１期は 10％だったが、他は第１期も少なく、10％以下であった。

なお、各分類項目の今期の特色は、つぎのとうりである。

1) 第１グループの中の「教科学習の評価」のうちａ）では、教科別の評価が主力で、教科内の観点別評価は少ない。ｂ）では、診断的評価、年度末

の総括目的の評価の他に、新たに平常の形成的な評価が加わっていることが注目される。これは、後に「形成的評価」として特集されるもののはしりということができよう。

第1グループの「学習指導、生活指導」のうち、生活指導に下位分類されるテーマの中では、問題児の教育相談やカウンセリングの特集が比較的多い。学習指導に分類されるテーマは、表にみられるようにさまざまな学習指導の問題を扱い、特に中心となるものは見られない。

2) 第2グループの中の「標準化検査」では、学力、知能・適性、性格・行動と巾広く出揃っている。標準化テストの実施計画も、第1期同様にとり上げられている。

「教育評価の技術・方法」については、学力試験やテストが中心であるが、その作製法から採点・処理、結果の利用の仕方に至まで、評価の全過程に渡って技法をとりあげている。

3) 第3グループの「教科外活動・生活指導の評価」は、問題児のカウンセリング・診断の他に、新たに進路指導と入学試験の問題をとりあげている。

「学校経営・教育課程と評価」のところでは、単に学校評価でなく、新しい学校経営の評価という立場の特集が注目される。

「教育評価の記録簿」のところでは、指導のための公簿としての指導要録の他に、新たに家庭連絡のための通信簿がとり上げられている。

「評価の課題・歴史」については、テスト法の歴史を新たにとりあげている。

(3) 第3期（昭和40〜44年）の特集テーマの分類（テーマ数総数は59）

1) 教科別学習の評価（テーマ数9）
- a) 教科別・観点別の学習評価
  - ① 技術・家庭の評価（40/12） ② 作文・造形の評価 （41/6）
  - ③ 創造性の指導と評価（43/4）
- b) 評価目的・機別別の学習評価
  - ① 賞（動機付け）と教育評価 （41/12）
  - ② 授業のプロセスに於る評価 （44/4）
  - ③ 高校選抜法の問題点 （42/1）

④ 観察指導過程とその評価 (43/4)
⑤ 学習過程の多様化と評価 (44/9)
⑥ 学業不振児の診断 (42/4)

2) 教科外活動、生徒指導の評価（テーマ数３）
① 交通安全指導と評価 (43/7) ② 集団指導の評価 (44/6)
③ 特別教育活動の指導と評価 (43/5)

3) 学校経営、教育課程等の評価（テーマ数２）
①教師負擔量の評価 (41/12) ② 学校経営の評価 (44/11)

4) 標準化検査（テーマ数９）
① 性格テストの効用と限界 (40/6)
② 道徳性テスト (40/8)
③ 特殊教育とテスト (40/10)
④ ビネー特集 (41/1)
⑤ 学級経営におけるテストの活用 (41/4)
⑥ 知能及び学力検査 (42/11)
⑦ 学力テストの効果的な使い方 (43/2)
⑧ 問題児の早期発見 (43/3)
⑨ 心理検査の妥当性と信頼度 (43/10)

5) 評価の技術・方法（テーマ数９）
① 学校放送の利用と評価 (41/9)
② ○×テスト批判に答える (41/10)
③ 記述式テスト (41/11)
④ 学習評価のテストと観察 (42/9)
⑤ 学習評価のテストと観察 (42/10)
⑥ 教師作製テスト (44/8)
⑦ 特殊学級における評価 (44/1)
⑧ 幼稚園に於ける評価の方法 (44/10)
⑨ 教育評価の技術 (44/8)

6) 教育評価の記録簿（テーマ数６）
① 行動・性格の測定と記述 (41/2)
② 指導要録と内申書、通信簿 (42/2)
③ 内申書の信頼性を高める (42/12)
④ テスト結果をどのように記録するか (43/12)
⑤ 通信簿と相対評価 (44/7)
⑥ 新指導要録の指針 (44/8)

7) 教育評価の課題・歴史（テーマ数５）

① 教育とテスト	(40/4)	② 教育評価の再検討	(43/8)
③ 新教育課程における評価	(43/9)	④ 教育評価研究の動向	(44/3)
⑤ 評価の歴史に学ぶ	(44/12)		
8) 学習指導、生活指導（テーマ数 14）			
① 家庭学習の検討	(40/7)	② 補修教育の再検討	(42/5)
③ 創造性の問題	(40/9)	④ 新学習指導法	(40/11)
⑤ 暗記力と思考	(42/6)	⑥ 家庭に於る予習・復習	(42/7)
⑦ 宿題と家庭学習	(43/6)	⑧ 学校における教育相談	(42/3)
⑨ 交通安全教育	(40/5)	⑩ 進学指導	(41/5)
⑪ 家庭教育	(41/7)	⑫ 健康教育	(41/8)
⑬ 生徒指導主事の任務	(42/3)		
⑭ 安全教育	(42/8)		
9) その他の教育問題（テーマ数は 2）			
① 教育における人間像	(40/1)	② 学級担任制と教科担任制	(41/3)

第 3 期（昭和 40～44 年）の特集テーマの分類では、表に見られる「学習指導、生活指導」が 14 テーマで、総テーマ数の 20%を超えている。

総テーマ数 10%代と、10%以下は、それぞれ 4 つづつある。その詳細は、つぎのとうりである。

1) 20%代の「学習指導・生活指導」は今回も多様な特集テーマがみられる。比較的多いのは、家庭学習に関するもので、家庭での予習・復習、宿題などの問題がとりあげられている。

2) 総テーマ数の 10%代の一つである「教科学習の評価」においては、a）の教科別ないし観点別の学習評価は 3 つにすぎない。これに対して b）の評価目的・機能別の評価は 6 テーマもあり、これまでの最高である。これまでのように、診断的、形成的、総括的な目的の評価の他に、選抜目的や動機付けのための評価もとりあげられている。同じく総テーマ数の 10%代を占める「標準化検査」では、性格検査、学力検査をどう有効に生かすか、学級経営、問題児の早期発見のために、標準検査をどう有効利用したらよいか。このように、標準化検査の有効利用に的をしぼった特集テーマが多い。

「教育評価の技術・方法」も 9 テーマで 16%であるが、テスト法、観察

法、記述式テスト等、さまざまな評価技法をとり上げている。

「教育評価の記録簿」では、これまでにとりあげられた指導要録、通信簿の他に、新たに内申書が2テーマとりあげられている。

3) 総テーマ数の10%以下のものである「教科外活動・生活指導の評価」、「学校経営・教育課程の評価」については、とりたてて目新しいことはない。

「教育評価の課題・歴史」は、今期は5テーマで、これまでの最高であった。

(4) 第4期（昭和45年～49年）の特集テーマの分類（テーマ総数は55）

1) 教科学習の評価（テーマ数は15）

a) 教科別・観点別の学習評価

① 国語の新しい評価 (47/9) ② 社会科の新しい評価 (47/10)
③ 算数科の新しい評価 (47/11) ④ 理科の新しい評価 (47/12)
⑤ 市販テストの問題 (48/1) ⑥ 音・図・美術の評価 (48/4)
⑦ 保・体と技・家庭の評価 (48/5) ⑧ 道徳の評価 (48/6)
⑨ 学習意欲の伸し方と評価 (49/8)
⑩ 読解・読書指導の評価 (49/11)

b) 評価目的・機能別の学習評価

① 入学者選抜 (46/1) ② 学力テストの年度末利用 (46/2)
③ 自己評価の考え方・やり方 (48/9)
④ 学業不振の診断とテスト (49/5)
⑤ 授業の個別化と評価 (49/10)

2) 教科外活動、生活指導の評価（テーマ数1）

① 特別活動の指導と評価 (48/7)

3) 学校経営、教育課程等の評価（テーマ数0）

4) 標準化検査（テーマ数10）

① 性格テストの活用と限界 (45/2)
② 生活環境の診断と改善 (45/4)
③ 才能の発見 (45/5)
④ 標準検査の質的向上 (46/12)
⑤ 進路指導と標準検査 (48/12)
⑥ 標準学力検査の利用 (49/4)

⑦ 教育相談と診断テスト (49/5)
⑧ 知能検査の信頼性・妥当性 (49/7)
⑨ 評価の年間計画 (46/3)
⑩ 学校経営のための評価計画 (48/11)

5) 教育評価の技術・方法（テーマ数 4 ）
① 教育機器と教育評価 (47/2)
② 教育目標の分析と評価 (49/1)
③ 絶対評価・相対評価 (48/8)
④ 視聴覚教育の評価 (48/11)

6) 教育評価の記録簿（テーマ数 11）
① 指導要録改訂の問題点 (45/6) ② 同左(45/7) ③ 同左(45/8)
④ 補助簿・通信簿 (45/9)
⑤ 内申書の信頼性・妥当性を高める (45/11)
⑥ 新しい指導要録の指針 (46/4)
⑦ 通信簿をどうする (46/7)
⑧ 指導要録の特活の記録 (46/8)
⑨ 指導要録、内申書、通信簿 (47/7)
⑩ 指導と評価の記録 (49/2)
⑪ 通信簿のつけ方 (48/2)

7) 教育評価の課題、歴史（テーマ数 3 ）
① 教育の現代化と評価 (46/6)
② 初・中等教育の改善と評価 (46/9)
③ 新しい教育評価の在り方 (47/8)

8) 学習指導、生活指導（テーマ数 11）
① 創造性の教育 (45/10)
② 教科学習に於る思考の問題 (46/5)
③ 創意工夫の育て方 (47/1)
④ 考える力と態度 (48/10)
⑤ 創造性 (49/9)
⑥ 学校紛争と生徒指導 (45/1)
⑦ 学校行事の再検討 (45/3)
⑧ 子どもの余暇生活 (47/4)
⑨ 自主性 (49/3)
⑩ 情操教育の課題 (46/10)
⑪ 学園紛争の反省 (45/8)

第4期(昭和45年〜49年）の特集テーマの分類の中で、総テーマ数の20%を超えるものは「教科学習の評価」ただ1つである。

総テーマ数の10%代は、「標準検査」、「教育評価の記録簿」、「学習指導・生活指導」の3つで、これらは10%代の常連ともいうべきグループである。

これまで10%代の常連だった「教育評価の技術・方法」は、今回は4テーマ7%と下降している。この他に10%以下には「教科外活動の評価」、「学校経営・教育課程の評価」、「教育評価の課題歴史」、「その他の教育問題」という常連が、第3グループを形成している。

つぎに、上記3グループ別に、さらに詳しく特集テーマを分析してみよう。

1) 「教科学習の評価」はテーマ数15、総テーマ数の25%で、これまでの最高である。この中のa）教科別・観点別の学習評価は10テーマで、これまでのa）分類の最高である。本誌の最も中心的なテーマは教科別の学習評価であって、この時期から、本誌の特色が極めて鮮明になったといえよう。

2) つぎは総テーマ数の10%代である第2グループについて。先ず「標準化検査」は10テーマ、17%で、これまたこの分類でのこれまでの最高である。知能、学力、性格、生活環境、才能と各種の標準化検査をとり上げるだけでなく、妥当性・信頼性など標準化検査の質的向上に関するテーマが2つとりあげられている。評価の年間計画も、一層分化した形でとり上げられている。「教育評価の記録簿」は11テーマ、18%で、10%代でも高い値となっている。指導要録については、各欄別に分けて詳細に特集している他に、通信簿、内申書、補助簿など、広く教育評価の記録簿をとりあげ、特集している点では、今期が最高である。今期内に指導要録のかなり画期的な改訂があり、それを受けての特集である。

「学習指導・生活指導」は、11テーマ18%で、この分類としては平均的なテーマ数である。内容的には、創造性、創意工夫、考える力、思考力の指導に関する特集テーマが今期はめだつ。生活指導では、ようやくおさまった学園紛争の反省、その上に立っての情操教育や、特別活動中心の自主的態度の育成などに関するテーマが、時代を反映している。

3) 第3グループでは、今期初めて4テーマ7%と10%以下に転落した「教

育評価の技術・方法」で、教育機器のあるものをどう評価機器として用いるかという特集、絶対評価相対評価という評価基準に関する基本問題、それに視聴覚教育の学習評価をいかに行うかという問題を扱っている。テーマ数はすくないが、いずれも注目すべき評価に関するテーマということができる。

「教育評価の課題・歴史」は3テーマ、7％にすぎないが、ここでもこの分類領域としては興味深い今日的課題をとりあげている。教育の現代化と評価、初・中等教育の改善と評価、新しい教育評価の在り方の3つが、それである。第3グループについては、上記の2つ以外には、今期は特に目新しいこと、注目すべきことは見当たらない。

なお1）の「教科学習の評価」に関しても、つけ加えたいことがある。それは、b）の評価目的・機能別の学習評価の特集テーマである、③自己評価の考え方・やり方と、⑤授業の個別化と評価という2つの特集テーマが注目に値する。前者は、自己教育、生涯教育のために必要な評価である。後者は教育評価の最も新しい動きと、評価の本質的な機能につながるものだからである。

(5) 第5期（昭和50年～54年）の特集テーマの分類（総テーマ数は60）

1）教科学習の評価（テーマ数26）

a） 教科別、観点別の学習評価

①	新しい教科評価の方法 ― 国語	(50/8)
②	〃 ― 社会	(50/9)
③	〃 ― 算・数	(50/10)
④	〃 ― 理科	(50/11)
⑤	作品・鑑賞の指導と評価	(51/1)
⑥	技能・態度の評価	(51/3)
⑦	発想力の指導と評価	(52/2)
⑧	作文の指導と評価	(52/5)
⑨	新教育課程と評価	(52/8)
⑩	自ら考える力の指導と評価	(53/1)
⑪	移行期に於る指導と評価 ― 国語	(53/4)

⑫ 〃 — 社会 (53/5)
⑬ 〃 — 算・数(53/6)
⑭ 〃 — 理科 (53/9)
⑮ 〃 — 保・体(53/11
⑯ 〃 — 音・図(53/12)

b) 評価目的・機能別の学習評価
① 指導過程の形成的評価 (50/3)
② 適正処置交互作用と評価 (50/8)
③ 自己評価の仕方・生かし方 (51/6)
④ 授業過程に於るテストの作り方 (51/7)
⑤ 一人一人を生かす指導と評価 (51/8)
⑥ 完全習得学習と評価 (52/4)
⑦ 落こぼしをなくす指導と評価 (53/3)
⑧ わかる授業と評価 (53/7)
⑨ 単元学習の評価の進め方 (54/4)
⑩ 学習意欲を高める評価 (54/7)

2) 教科外活動、生活指導の評価（テーマ数 6）
① 行動・道徳の評価 (51/2)
② 特別活動の指導と評価 (51/12)
③ 進学指導資料の作り方 (52/1)
④ 情緒障害児の診断と指導 (52/6)
⑤ 健康・安全の教育と評価 (54/9)
⑥ しつけと評価 (54/5)

3) 学校経営、教育課程等の評価（テーマ数 4）
① 教育計画・教授法の評価 (50/3)
② 学級経営のための資料のとり方 (50/7)
③ 学級経営と評価 (52/9)
④ 教材の選択基準と評価 (54/8)

4) 標準化検査（テーマ数 5）
① 教育・心理検査の役割 (50/1)
② 知能検査と教育指導 (50/3)
③ 学習評価に於る標準検査の役割 (51/11)
④ 診断的評価と標準検査 (52/3)
⑤ 個に応じた指導と評価（心理検査の役割） (53/2)

5) 教育評価の技術・方法（テーマ数 4）
① 絶対評価の具体的方法 (50/5)
② 授業における評価計画の立て方(51/7)

③ 到達度評価の方法	(52/10)
④ 教育評価の教育工学的方法	(52/1)
6) 教育評価の記録簿（テーマ数 4）	
① 指導要録の問題	(50/2)
② 望ましい通信簿	(52/12)
③ 指導要録に望む	(53/10)
④ 指導要録改善の方向	(54/6)
7) 教育評価の課題・問題史（テーマ数 2）	
① 偏差値問題と偏差値	(51/9)
② 教育評価 30 年の流れと課題	(53/8)
8) 学習指導、生活指導（テーマ数 7）	
① 資料活用能力とその生かし方	(50/6)
② 基礎学力を伸ばす	(51/4)
③ 習熟度別学級編成の問題	(54/1)
④ 学校教育におけるゆとり	(54/2)
⑤ 家庭教育に望む	(54/12)
⑥ 学級経営と教師	(54/10)
⑦ 新教育課程と特別活動	(54/11)
9) その他の教育問題（テーマ数 2）	
① 教養教養としての教育統計 (52/7)	② 親と教師 (54/3)

第 5 期（昭和 50 年〜54 年）の特集テーマの分類で、総テーマ数の 20%以上を占めるのは、「教科学習の評価」たゞ一つである。テーマ数 26、43%と前期の二倍近くまで、テーマ数は飛躍的に伸びている。

テーマ総数の 10%代には、新たに「教科外活動・生活指導の評価」が加わり、他に「学習指導・生活指導」が、相変わらず名を連ねている。

「標準化検査」、「評価の記録簿」は今回はそれぞれ 4 テーマ 7 %と、10%以下に下落した。他に 10%以下は「学校経営・教育課程の評価」等 4 分類があり、合わせて 6 分類が 10%以下のグループを形成している。各分類毎のテーマの詳細は、つぎのとうりである。

1) 一気に総テーマ数の 43%に増大した「教科学習の評価」は、a）の教科別・観点別の学習評価が 16 テーマ、評価目的・機能別の評価が 10 テーマである。前者の中では、「新しい教育評価の方法 — 国語」という形式の特

集テーマが四回連続し、「移行期における指導と評価 — 算数」といった形式の特集テーマが六回連続している。これは教育課題の改訂が行われ、丁度それへの移行期に入っているという、教育界の変動に合わせた特集といえる。

後者の中では、誰にもわかる個人に見合った学習指導と、そのような授業に役立つような評価とが、数多く特集されている。適性処置交互作用と評価、一人一人を生かす指導と評価、完全習得学習と評価その他あわせて10テーマは、いずれもそのような特集テーマである。

2) 総テーマ数の10%代を占める「教科外活動、生活指導」は、初めて10%代で、丁度6テーマ、10%である。特集テーマは、行動・道徳、特別活動、進路指導、情緒障害児、健康・安全、しつけと巾広くいろいろな生活指導上の問題についての評価をとり上げている。

「学習指導・生活指導」の中の学習指導については、資料活用能力と基礎学力とが新しいところであり、かつ重要な教育指導の課題といえよう。生活指導については、特別活動に新設されたゆとりの時間特集が目新しいところである。

3) 10%以下の第3グループには、9分類中の6つが所属する。先ず「教育評価の技術・方法」のところでは、評価基準に係わる絶対評価と相対評価が、別々に特集されているところが目新しい。

「教育評価の課題・歴史」のところでは、教育評価30年の流れという評価の戦後史と共に、偏差値教育といわれる大きな社会問題となった教育現象の特集が注目される。この他の10%以下の分類のところでは、とくにつけ加えることはない。

(6) 第6期（昭和55年〜59年）の特集テーマの分類（テーマ総数は58）

1) 教科学習の評価（テーマ数は37）
a) 教科別、観点別の学習評価
① 基礎的・基本的事項の学習と評価 — 国語（55/6）
② 〃 — 算数（55/9）

③ 〃 — 社会 (56/3)
④ 〃 — 理科 (56/7)
⑤ 〃 — 音・図 (56/9)
⑥ 〃 — 保・体 (57/3)
⑦ 〃 — 家・英 (57/5)
⑧ 観点別到達度評価の方法 (55/8)
⑨ 自ら学ぶ態度の評価 (55/10)
⑩ 技能目標とその評価 (55/11)
⑪ 関心・態度・目標の具体化と評価 — 国・数・図 (56/10)
⑫ 〃 — 理・英・音 (57/2)
⑬ 〃 — 社・体・家 (57/7)
⑭ やる気を起こす指導と評価 (57/4)
⑮ 観点別学習状況の評価 — 国・理 (58/1)
⑯ 〃 — 算数・数 (58/2)
⑰ 〃 — 社・英 (59/1)
⑱ 情意目標とその評価 (55/1)

b) 評価目的・機能別の学習評価

① 学習過程の評価の技術 (55/2)
② 自己評価 (55/7)
③ 自ら学ぶ能力と評価 (55/10)
④ 到達度評価と落こぼれ防止 (55/12)
⑤ 授業評価の動向と技術 (56/4)
⑥ 発展的学習の指導と評価 (56/6)
⑦ 到達度を踏まえた指導 (56/12)
⑧ 形成的評価の仕方・生かし方 (57/6)
⑨ 単元学習における事前の評価 (57/9)
⑩ 落こぼれは防げるか (57/8)
⑪ 形成的評価と授業改善 (58/4)
⑫ 〃 — 算・保・体 (58/7)
⑬ 〃 — 理・英 (58/10)
⑭ 単元末の総括的評価 (57/10)
⑮ 達成度の診断と個別指導 (58/9)
⑯ 形成的評価と授業改善 — 音・図・家 (59/2)
⑰ 診断的評価と授業設計 (59/3)
⑱ 個を生かす指導と評価 (59/5)
⑲ 学ぶ意欲・態度を育てる評価 (59/7)

2) 教科外活動、生活指導の評価（テーマ数２）

① 生徒指導と評価 (55/5)

② 心身障害児の教育と評価	(56/11)
3) 学校経営、教育課程等の評価（テーマ数３）	
① 学校経営と評価	(55/3)
② 教育課程評価と文部省学力調査	(58/12)
③ 学校・学級経営の評価	(59/11)
4) 標準化検査（テーマ数３）	
① 非行化傾向の早期発見と指導	(56/2)
② 生徒指導における性格検査利用	(57/2)
③ 診断的評価と標準検査	(58/3)
5) 教育評価の技術・方法（テーマ数４）	
① 到達度評価の技術	(56/2)
② 評価における教育工学的技法	(58/11)
③ 教師自作テストの生かし方	(59/8)
④ 入試制度の改善	(59/12)
6) 教育評価の記録簿（テーマ数３）	
① 新指導要録	(55/4)
② 通信簿改善と補助簿の生かし方	(56/1)
③ 指導要録の「学習の記録」	(57/1)
7) 教育評価の課題、問題史等（テーマ数２）	
① これからの教育評価への期待	(59/4)
② 教育改革論と評価～偏差値問題～	(59/9)
8) 学習指導、生活指導（テーマ数４）	
① 考える力	(57/6)
② 自己教育力を育てる	(58/10)
③ ゆとりの時間における総合活動の計画	(57/11)
④ 子どもの非行を考える	(58/8)

第６期（昭和55年～59年）の特集テーマ９分類では、「教科学習の評価」が一気に37テーマ、総テーマ数の64％と、これだけで６割を超える急上昇振りを示す。後の８分類は、いずれも10％未満に転落している。これまでの５期に全く見られない大きな変化である。各分類毎の特集テーマの詳細を、つぎに眺めてみよう。

1) 「教科学習の評価」のうち、ａ）教科別・観点別の評価は18テーマで、ｂ）評価目的機能別の評価の19テーマとテーマをほぼ折半している。前者

については「基礎的・基本的事項の学習評価　　国語」というような形式の特集テーマが、教科別に連続して7テーマを占めている。基礎的・基本的事項（学習内容）は、すべての児童が到達をめざすべき学習目標であり、かつ将来の学習にも必要不可欠な学習内容から成り立っている。それゆえこのような学習とその評価の特集は、十分注目に値する。

a）教科別・観点別学習評価の中には、「関心・態度目標の具体化と評価国・数・図」というような形式の特集テーマで、2、3の教科グループ別に連続して4回特集テーマとなっている。関心・態度という情意能力は、知識、技能、思考と共に、学力の4大構成要素である。しかしその教育目標の分析や教育目標の細分化は、他の学力構成要素にくらべて研究が十分でなかった。評価の技術・方法についても、同様に研究が遅れ、その評価技術の発達が遅れていた。それゆえ、この面の評価を連続して4回も特集したことは、注目してよい。

「教科学習の評価」の中のb）評価目的・機能別の評価の中では、ほとんどすべての目的・機能別の評価がとりあげられている。この中で、授業の過程で個人に見合った指導調整を行い、落ちこぼれをなくす働きを受け持つのが、形成的評価である。この形成的評価について、多面的に特集を行っていることは注目に値する。

2)　総テーマ数の10%未満の8つの分類領域についても、2、3注目すべきところがある。「学校経営・教育課程」の中では、新しい学校経営・学級経営の立場からの評価が2テーマ特集されている。教育課程の評価についても、文部省学力調査資料にもとずく教育課程評価にみるべきものがある。

「教育評価の技術・方法」については、評価への教育工学的方法の導入、教師自身の手による自作テストによる学習評価、学力水準の維持に欠かせない到達度評価、今日的課題である入試制度の改善 —— こういった学習評価に関する技術的・方法論的な重要問題が、前の各期の特集で終わることなく続けられている。今期独特の新味はないが、他の分類領域についても、同様に重要な問題がとりあげられている。

3．むすび

(1) 本稿の第1章では、(表1)に示す教育雑誌9誌について、各誌とも最近3ケ年前後の特集テーマを分類し、その考察を行った。そのあらましは、つぎのとうりである。

1) 分析された教育雑誌の多くは、その雑誌名から予想できるような、特集テーマ構成を行っていた。たとえば、最初に分析した「教育展望」は、学校論、指導論、評価論、教育改革論（教育課程論）の4領域に大別することができ、高所から学校教育の展望を行うところに、最大の特色が見られる。二番目に分析した「初等教育資料」は、初等教育に係わる各領域を広くとりあげているが、教科の学習指導、教科外の生活指導に重点がおかれている。特集テーマの内部領域は、比較的狭く絞られ、現場での初等教育に役立つ資料が多い。

2) 同じく教育雑誌といっても、特集テーマ構成の多様性や重点の置きどころ、あるいは特集テーマの内部領域の広狭やきめの細かさには、各誌でかなりの相違がある。1)でとり上げた「教育展望」についていうと特集テーマ構成は前期の4領域に広くまたがっており、各領域にほゞ均等の重み付けをしている。特集テーマの内部領域はやゝ広く、とくにきめが細かいとはいえない。「初等教育資料」については、特集テーマ構成は広い領域にまたがっているが、各領域均等な重みでなく、教科学習の指導と教科外の生活指導に重点が感じられる。特集テーマの内部領域は細分化されており、現場での初等教育に役立つ資料を提供するもの、といえよう。

3) 教育評価論に限っていえば、表に現れた特集テーマに関する限り、全体としてはあまり多くとり上げられていない。例外的に、「教育展望」においては、4大領域の1つとして位置付け、かなりの重みを置いている。最後から3番目に分析した「指導と評価」は特例であり、分析された39テーマ中の22テーマ、つまり約6割が評価論である。その多くは、指導と評価の表裏一体の関係を前提とした、教育評価論である。きめの細かさについても、評価論に関しては9誌中の随一である。

以上のような分析から、教育雑誌の一般的特性、各教育雑誌の持つ特色が、ある程度まで明らかとなった。これにより、自己の必要とする知識・情報を得るためには、どの教育雑誌の選択を行えばよいか———そういう教育雑誌選択の目安が得られるであろう。

(2)　本稿の第2章では、教育雑誌「指導と評価」をとり出し、創刊号以来30年に渉る特集テーマの分析を行った。5年単位に6期に分け、各期ごとに、特集テーマを9領域に分けて分類し、これに考察を加えた。これにより明らかになったことのあらましは、つぎのとうりである。

1)　創刊以来6期に渉る全期間の総テーマ数は344で、これを9領域に分類したものは、第2章初頭（表2）の最後の行である。これによると、初めの7領域は評価論の下位領域で、それらのテーマ数は総テーマ数の8割弱である。とくに「教科学習の指導と評価」はその半数を占める。ここから本誌は、教育評価に重点を置いた教育誌であり、とくに指導と評価の表裏一体観に立ち、教科学習の評価に中心を置いていることが分かる。

2)　表の6期別の特集テーマ分類欄をみると、評価論の7領域は、ほとんどすべての期で扱っている。ここから本誌には、教育評価の全領域への目配りが読みとれる。

3)　教科学習の評価について、第2章の細かい表をみると、「教科学習の評価」は、a）教科別・観点別の評価と、b）評価目的・機能別の評価とに大別され、それぞれきめ細かな特集を行っている。他の評価領域についても、ほゞ同様なきめの細かさがある。本誌は、教育現場で眞に役立つきめ細かな評価資料を提供するもの、といえよう。

4)　「標準化検査」、「教育評価の技術・方法」、「教育評価の記録簿」は、「教科学習の評価」に次いで多くとりあげられている評価論の領域である。しかし「教科外生活指導の評価」、「学校経営・教育課程の評価」、「教育評価の課題・歴史」などの評価領域も、ほとんど各期でとり上げられ、それなりに重要視していることがわかる。

5) 本稿は「教育雑誌の分析 —— その１」であり、特集テーマの分類と考察を、手始めとして行ってきた。今後の課題としては、さらに詳細に、一つ一つの論文内容の分析が残されている。「教育雑誌の分析 —— その２」では、先ず「指導と評価」の評価論に関する特集テーマ各領域から主要な論文を抜き出し、その内容分析を行う予定である。